新出の四社明神高祖大師画像について

内田啓一

本図はとある個人の所蔵になる一幅である。十四世紀と判じられる画風を示し、しかも四社明神高祖大師画像という他に類例をみない作例である。加えて上方に蓮台上月輪に種子、下方には高野山壇上伽藍があらわさる構図であることも興味深いものといえよう。

図様を詳述すると牀座に坐した弘法大師空海を中央に、丹生都比売明神、狩場明神、蟻通明神（気比大神）、厳島明神が配され、最上段には蓮台上月輪に向かって左から四宮の種子「ス」、二宮の高野明神の種子「バン」、一宮の丹生津比売の種子「アーク」三宮の蟻通明神の種子「キリーク」が配される。最下段には高野山壇上伽藍が描かれている。すなわち大塔、金堂、御影堂などの高野山の根幹をなす堂舎が描かれている。

以上の点をふまえて、空海と壇上伽藍をあらわした画像である福岡市博物館本及び西國寺本との検討を行い、その制作年代を十四世紀中頃と考えた。

次いで、『金剛峰寺建立修行縁起』や『後宇多院御幸記』、高野山金剛峰寺蔵丹生明神画像色紙、高野山金剛峰寺本弘法大師画像及び高野四所明神画像の弘法大師画像賛、『大覚寺太上法皇御幸』、『高野春秋』などの資料を用いて、兜率天と空海、そして高野山の関係を考慮しながら、その制作背景について考察を加えた。

ゴヤと王室絵画コレクション

木下亮

フランシスコ・ゴヤ（一七四六―一八二八）におけるベラスケスの影響は、これまで繰り返し指摘されてきた。他方、十八世紀後半の美術理論のなかでベラスケス評価が高まっていったことも、近年の研究で跡付けられてきた。しかしゴヤがマドリードの新王宮をはじめ諸王宮・離宮で実見することのできた絵画コレクションについての分析は進んでおらず、ベラスケスの影響を考察するときの具体的な絵画装飾の空間はいまだ提示されていない。そこでゴヤと王室絵画コレクションとの接点を以下の三点に絞り考察した。第一は、ゴヤが一七七八年から取り組んだベラスケスの版画による模写である。模写されたベラスケス作品は、新王宮の「食堂」に飾られていた騎馬肖像が中心であった。第二はゴヤが関わった『カルロス三世王室財産目録』の作成である。ゴヤは他の二名の画家とともに諸王宮に所蔵されていた絵画作品の記録と査定を行い、一七九四年『目録』に署名している。従来この任務はゴヤの芸術のなかで大きな意味を持たないとして看過されてきたが、ゴヤが宮廷画家として不可欠な知識を得る契機であったに違いない。第三はナポレオン美術館のための「スペイン絵画オリジナル作品五〇点」の選定であるが、ここからゴヤの明確な意図を読み取るのは困難であった。